

Title	フィジー人とキリスト教 : キリスト教と「他界観」 そのII : キリスト教活動の実状とフィジー人のアイ デンティティ
Author(s)	橋本,和也
Citation	年報人間科学. 1987, 8, p. 145-163
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9989
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学人間科学部 〔一九八七年二月〕 『年報人間科学』第八号

一四五頁——一六三頁

キリスト教と「他界観」そのⅡイジー人とキリスト教

キリスト教活動の実状と フィジー人のアイデンティティー

橋

本

也

和

フィジー人とキリスト教

キリスト教と「他界観」 そのⅡ

キリスト教活動の実状とフィジー人のアイデンティティ

フィジーにキリスト教が始めて拠点を持ったのは一五○年前である。前論文「キリスト教と『他界観』(本誌七号)で述べた如く、なった。現在ではフィジー人全てがキリスト教徒であり、村落内でなった。現在ではフィジー人全てがキリスト教徒であり、村落内でなった。現在ではフィジー人全てがキリスト教徒であり、村落内でなった。現在ではフィジー人全でがキリスト教徒であり、村落内でなった。現在ではフィジー人全でがキリスト教徒であり、村落内でなった。現在ではフィジー人全でがキリスト教徒であり、村落内である。前論文「キリスト教と『他界観』(本誌七号)で述べた如く、フィジーではキリスト教が始めて拠点を持ったのは一五○年前である。

見られる「気前の良さ」を名誉と考える信条と、33儀礼的関係に見次に首長-平民という上下関係、対等者同士の関係など22社会関係に社会における信仰と、アイデンティティの問題についてまず述べる。本論では、人口の半分以上を占めるインド人移民を抱える(1複合

スト教という等式が成立し、それが彼らのアイデンティティの基盤護、発展させているキリスト教の活動を述べ、フィジー文化=キリることを検討する。そして、最後に、⑷フィジー文化を積極的に擁られる伝統=首長制擁護の心情が、フィジー人の拠り所となってい

①複合社会と信仰――アイデンティティの問題――

となっていることを示していきたい。

の他の宗派の信者に寛容であり、クリスマス前の連夜のミサでは、キリスト教徒の七四パーセントを占めるメソディスト派は、村在住違っても皆キリスト教だと、分裂よりも連帯を強調している。特にがアンティスト、アセンブリィズ・オヴ・ゴッド等の他にも多くドヴァンティスト、アセンブリィズ・オヴ・ゴッド等の他にも多くフィジーには、メソディスト、カトリック、セヴンス・デイ・ア

っても皆フィジー人であり、共に一つ村に住む仲間であるという言「宗派は違っても皆キリスト教徒である」。この言葉には、宗派は違一夜か二夜他宗派の説教者を招いて儀礼をまかせている所もある。

外の意味が含まれている。

義や行事についてはほとんど理解を示していない。 義や行事についてはほとんど理解を示していない。 義や行事についてはほとんど理解を示していない。 義や行事についてはほとんど理解を示していない。 義や行事についてはほとんど理解を示していない。 義や行事についてはほとんど理解を示していない。 義や行事についてはほとんど理解を示していない。 義や行事についてはほとんど理解を示していない。 義や行事についてはほとんど理解を示していない。 義や行事についてはほとんど理解を示していない。

関係が生じている。

はフィジー人とインド人が分担している。この両者が衝突する場所着のいく人かの有力な首長達から選ばれている。大臣や政府の要職回の選挙で国会の議席を失っている。現在首相と総督はフィジー土共存を主張し、インド人追放を叫ぶフィジー人ナショナリストは前政治的には、与党も第一野党もフィジー人とインド人との協力・

はキリスト教に改宗し、フィジー人の村に住んでいる。 はキリスト教に改宗し、フィジー人の村に追いやった事例がある。彼女がそれ以上の私生児がいた。子供達は皆祖父母の実子として登録され、私生児としての不便を蒙ることはない。その父親としてはフィジー人のほか、白人、日本人などがいるが、インド人との混血はほとんどない。その主な原因はインド人社会にある。インド人との混血はほとがない。その主な原因はインド人社会にある。インド人とはほとんどない。その主な原因はインド人社会にある。インド人とはほとが娘を親族一同が非難し、夫の村に追いやった事例がある。彼女ド人娘を親族一同が非難し、夫の村に追いやった事例がある。彼女ド人娘を親族一同が非難し、夫の村に追いやった事例がある。彼女ド人娘を親族一同が非難し、夫の村に追いやった事例がある。彼女はキリスト教に改宗し、フィジー人の村に住んでいる。

なく、土地を離れて都市で商売を始めるインド人が多い。 した後、植民地政策の下で、労働力として五年契約で徴集されたインド南部からの移民の子孫である。一八七九-一九一六年の間に六万の広さで、そのほとんどをフィジー人が氏族(matagali)単位で所が今では土着のフィジー人の人口を上回っている(1°面積は四国程が今では土着のフィジー人の人口を上回っている(1°面積は四国程の広さで、そのほとんどをフィジー人が氏族(matagali)単位で所の広さで、そのほとんどをフィジー人が氏族(matagali)単位で所の広さで、そのほとんどをフィジー人が氏族(matagali)単位で所の広さで、そのほとんどをフィジー人が氏族(matagali)単位で所の広さで、そのほとんどをフィジー人が氏族(matagali)単位で所の広さで、そのほとの子孫である。一八七九-一九一六年の間に六万という。

が意識されることがないとは言えない。るいらいかし、対イスラム教徒や対キリスト教徒との関係では、宗教渡り等の機会がない限り、強く意識されることがないとの報告があっ教徒だが、選挙などの特別な機会や南インド系の寺院が行なう火ゥ語を会話程度しか話せなくなっている。宗教はほとんどがヒンドゥ語を会話程度しか話せなくなっている。宗教はほとんどがヒンド

現代では三世代以上経つインド人移民の若者達は、もはやヒンド

ゆるやかで、土地の風習を認め、古い信仰を決して認めてはいないないない。大なを殊更叫ぶ必要性を感じさせぬ原因であるとも言える。しかし、スト教会である。この土地の文化を包み込んでいるのが、キリの強力な支えとなる。この土地の文化を包み込んでいるのが、キリの強力な支えとなる。この土地の文化を包み込んでいるのが、キリスト教会である。しかし、立いと、文化的基盤がなくなっている現実が、フィジー人にナショナリーの強力な支えとなる。この土地の文化を包み込んでいるのが、キリスト教会である。特にメソディストとカトリックは、教養も規制も、スト教会である。特にメソディストとカトリックは、教養も規制も、スト教会である。

位置になる。

一文化という等式が成立する実状がある。が、存在を黙認しているところがある。そこにキリスト教=フィジが、存在を黙認しているところがある。

②社会関係とそれを支える「ソリ(贈与)」の信条

(a) 社会構造

(i) 垂直軸上の関係

いては、特別に扱われることはない。特に氏族間では、関係は対等ワ島に住んでいる。現在では大首長の称号継承権を持たぬ人物を除トゥイ・ヴィワという由緒ある大首長を中心とする三氏族が、ヴィ族を呼び寄せた。現在まで土地の首長を中心とする三氏族とロコ・

である。

とか、 きな意味を持っていたが、今では首長同様、地域の連帯を示す象徴 的に入ってきたり、 ツ単位で品物が集められ、交換される。マタニツも戦争時代には大 現在でもムバウ島で全国規模の贈与交換がある時には、 マタニツに属し、ムバウ島にとっての最も有力な同盟村であった。 交換され、 だけである。 の首長は、儀礼的贈与交換の場合にその存在が強く印象付けられる る象徴的存在にすぎぬ首長も多い。土地をホテルに貸している首長 なら大首長が村民の生殺与奪の権利を持っていたが、現代では単な が重なった最高位にロコ・トゥイ・ヴィワが居る。キリスト教以前 えて尊敬される。ここに階層原理と年長原理の二つが見られ、 長-村民という順序になる。しかし、年長者はこの世襲的な地位を超 (matanitu) (6)があった。ヴィワ島は隣島のムバウ島を中心とする (ロコ・トゥイ・ヴィワ) -土地の首長(サウ・トゥランガ) 大首長や土地の首長が村に居る場合には、村内の地位は、 由緒がありかつ学歴のある首長には、土地のリース料が優先 再分配される。フィジーには昔いくつかの勢力圏 現在でも各地域の最高首長の名の下で品物が集められ、 政府内で要職につく機会がある。しかし大部分 昔のマタニ 大首長 -氏族 両者

ができないものである。

布教の戦略的理由と、宣教師の本国も王制であるという事情から、化の体系の中に深く埋め込まれているのが分かる。キリスト教会も、や様々な敬意を示す行為(片膝をついて手を三回叩く)などが、文を規定し、敬語体系(尊敬を示す複数形や"saka"という敬語の使用)フィジー社会では首長を頂点とする社会構造が、垂直軸上の関係

(ii) 水平軸上の関係

首長制を全面的に認めていた(で)。

でフィジー人の商売は、特に雑貨店の場合には、ほとんどが代金の(madua)」だと考えられている。与えることを義務と考えているのはない。また、フィジー人全体に言えることだが、知人や親類からはない。また、フィジー人全体に言えることだが、知人や親類からはない。また、フィジー人全体に言えることだが、知人や親類からがかを頼まれた時、その品物があるのに与えないことは「恥に知いる。観察者には、日常生活での貸し借りは長い間にはほぼバラム和いる。観察者には、日常生活での貸し借りは長い間にはほぼバラム和いる。

ソリした方も、返済を心掛けてはいないし、期待してもいない。中ネギなどが貸し借りされる。食料に関しては、ケレケレをした方もための品物を融通し合う不可欠なシステムである。砂糖や紅茶、玉けているケレケレ(要求)システムであるぽ。しかし村落生活を送っけているケレケレ(要求)システムであるぽ。しかし村落生活を送ってれがフィジー人の生活を低い水準で平均化していると批判を受これがフィジー人の生活を低い水準で平均化していると批判を受

回収ができなくて失敗している。

となっており、

大きな交換の機会でもない限り実際に見て取ること

ている。と同量引き受けている。このような行為が、彼への敬意の源となった問量引き受けている。このような行為が、彼への敬意の源となっに一軒しかないが、村の仕事や税金の分担を数軒かかえる他の氏族は村に借りた品物を返している人もある。彼は、他の村人と同じ生活をには例外的に、村会議長をしている土地の首長⑤のように、忘れず

になっている。動機は別だが、村ではケレケレに制限を加えようと きた勤勉さを奨励するものである。 を調べられる物語もある(三)。キリスト教の倫理観は、 るようにタロ芋の若茎を分けてやると話している。この話はフィジー 関係⑸で、彼らからの要求には応じなければならぬという慣習法 らぬとその人は考えている。この関係は、ヴァスと言われる特別な てくるたびに交通費とか酒代とか、つまらない出費を求められるの 生活者にとっては今や面倒なものになってきている。村から人が出 ったことではない。死者の魂が祖先の国へ行く道中で爪ののび具合 人の間でよく聞かれる。怠け者を認めぬ倫理観はキリスト教に始ま いう話がきかれる。特に熱心なキリスト教信徒は、怠け者には同情 かし昔ながらの関係で、姉妹の子供からの要求には応じなければな 村落生活では必要不可欠なケレケレーソリの関係であるが、 本人のためには一切金を出さぬことにしたという例も聞く。 最初は食料を分けてやっても、二度目からは畑に行って植え 近年ゆるんで 都会 L

したいと望むのは、フィジー人の普遍的な傾向である。村では、食つまらぬケレケレは敬遠しても、「気前の良さ」を機会があれば示

の親類に贈ったという例がある。また個人経営の病院を営んでいるこのように与えること (soli) に価値を置く文化は、都市生活を始めても失われるものではない。村単位の贈与交換の場合や、身内の結婚や葬儀には百ドル単位で提供する。また働いた金をすべて飲んではたい。村単位の贈与交換の場合や、身内の結婚や葬儀には百ドル単位で提供する。また働いた金をすべて飲んでいた若者が、信仰に目覚めて酒をやめ、たまった金で船を買って村の結婚や葬儀には百ドル単位で提供する。また個人経営の病院を営んでいる。

医者は、自分の氏族員のために村に家を四軒建てている。

取れる。 取れる。 取れる。 取れる。 取れる。 の行動を規定している根本的信条 (=ソリのイデオロギー)が読み な贈与 (soli) は、フィジーの社会関係を支える重要な要素だと言う ことができる。客観的に見れば、均衡のとれた互酬的関係であるが、 で迎えた時や、贈与交換の時の「気前の良さ」の誇示には、フィジー 人の行動を規定している根本的信条 (=ソリのイデオロギー)が読み な贈与 (soli) と、水平軸上の関係における返済を条件にしない一方的 以上述べたように、垂直軸上の関係における平民の首長に対する

_

助教会組織と「気前の良さ」を誇る心情

の首長用の席が設けられ、説教者が首長より高くならないようにしないが、今でも高位の首長が居る村では、教会に説教壇と同じ高さ会的体質を持ち、首長制を当然のことと考えていた。ヴィワ島ではめている。メソディスト派はプロテスタントではあるが、英国国教教会は、神の前での平等を主張しながらも、首長制をそのまま認

ている所もある。

この信徒牧師(vakatawa)までが世俗の信徒である。信徒牧師に な。 教会で信徒のために祈る (masu) 資格を持ち、後者は教会の儀礼を は、 徒牧師に任命している。この場合には月々の謝礼金は支払われない。 は二年間の教育を受けた後、各教区会議で選ばれ任命され、 村の信者の指導監督するのが信徒牧師 (vakatawa) ⑶である。 熱心な信者は教会の礼拝儀式を分担する資格を取る。信徒祈禱者 青年期に堅信礼を受けて信仰を確かにする。堅信礼準備中の信徒 (masumasu)、信徒説教者(dau vunau)の両者があるが、 (siga tuberi) の後、堅信礼受礼信徒(siga dina)となる。 切執行する資格を持ち、一般信徒の最上位に位置する。これらの 信者としては、フィジー人のほとんどが幼児洗礼を受けている。 正規の信徒牧師を持てない場合は、 ヴィワ島では村から月に四五ドル(米ドルとほぼ同じ)支払わ 教区牧師には月に一七〇ドルを、教区全村から支払われる。 村の熱心な信徒説教者を信 村に住 その後 前者は 彼ら

新たに迎える牧師のために一万ドルを越す家を建てた。また交通用ドルを聖職者に支払うのは大きな出費である。その上、八五年には日々支払っている。ヴィワ村一軒の平均収入は約四〇ドルである。はかし月々七た、村人は信徒牧師のために一軒二ドル、教区牧師を迎えることができた。牧師誘致運動を数年前から続け、一九八五年一月にヴィワ村を中心牧師誘致運動を数年前から続け、一九八五年一月にヴィワ村を中心であった。近年は人口が少なくなり、教区牧師を迎えられなかった。

の船をヴィワ村だけが出費して一艘贈っている。

これらの経済的側面からも、教会がいかに村落生活において中心

そうとする、昔ながらの「気前の良さ」を評価する価値観にある。 している訳ではない。名誉欲とか見栄を張る気持ちが大きな影響を している訳ではない。名誉欲とか見栄を張る気持ちが大きな影響を は、これといって見つからない。全員キリスト教徒ではあるが、 由は、これといって見つからない。全員キリスト教徒ではあるが、 既に体制化している信仰活動には、自分の生活を犠牲にしてまで教 既に体制化している信仰活動には、自分の生活を犠牲にしてまで教 既に体制化している信仰活動には、自分の生活を犠牲にしてまで教 にヤンゴナを飲む。彼らに教会への出費を促す動機は、村の力を示 にヤンゴナを飲む。彼らに教会への出費を促す動機は、村の力を示 にヤンゴナを飲む。彼らに教会への出費を促す動機は、村の力を示 にヤンゴナを飲む。彼らに教会への出費を促す動機は、村の力を示 は いる訳では ない の は に ない の は に ない の は に で は いるが 説える。勿論これは 信仰心にだけ 由来 的な役割を果たしているかが 覗える。勿論これは 信仰心にだけ 由来 いる役割を果たしているかが 覗える。勿論これは 信仰心にだけ 由来 いる で は ない といる に ない に ない といる に ない に ない といる に ない に ない といる に ない に ない といる に ないる に ない といる に ない といる

()媒介者としてのマタニヴァヌアと牧師。

ヴィワ村は、フィジーで始めてフィジー語の聖書を印刷した場所

いて、神と信者の媒介者として神の言葉を伝え、信者の抱える問題取りをつける。一方牧師もまた、神―牧師―信徒という教会制度におう物(bulubulu)②をする。他村を首長が訪ねる時は、訪問儀礼の段訪者はまず彼の所を訪ね、首長への取り次ぎを頼み、来訪の挨拶に訪者はまず彼の所を訪ね、首長への取り次ぎを頼み、来訪の挨拶におりをつける。一方牧師もまた、神―牧師―信徒という教会制度においる。村では、来もつ媒介者であり、儀礼の場では式次第を執りしきる。村では、来もつ媒介者であり、儀礼の場では式次第を執りしきる。村では、来もつ媒介者であり、後礼の関係には、首長と臣下との間をとりマタニヴァヌア(matanivanua)とは、首長と臣下との間をとり

を神の前に伝える。そして礼拝儀礼を司る。

庭をかえりみずにヤンゴナを飲んでいる男達への不満の表明である ら嫁いできた女達は、村よりも家庭を第一に考えており、 主義はまず都市で浸透し、次第に村にも波及してきている。 る。 るのである む婦人部の集会でその考えを発表している(ミロ゚のこれは明け方まで家 を支える存在となっている。それに対し、後者は首長制を認めては 維持する機能を果たし、象徴的でしかなくなったとはいえ首長制度 いるものの、この体制を基本的な部分から崩壊する役をになってい 強調が村人の今までの在り方を覆す要因となっている。 両者の違いで決定的な点は、前者は村を代表する首長の代弁者で 男達にとっては村の一員としての連帯意識をここで表明してい 平民の台頭を助長する教育、そして何よりも家庭主義、 彼の媒介者としての存在自体が、首長と臣下との間の間隔を 家庭第一 牧師を囲 夫婦愛 他村か

る村人に対して大きな方向転換を要求する。牧師の存在は、伝統主義家庭第一主義を積極的に説くことは、 村や首長を第一に考えてい

に光明=衣服等の文明と共に変化をもたらした存在として彼は常にを主張しながら、常に変化を要求する存在であった。フィジーの地

敬意と感謝を示されている。

る他所者として神との仲介役を果たす適性があるといえる。 る他所者として神との仲介役を果たす適性があるといえる。 る他所者として神との仲介役を果たす適性があるといえる。 を地所者としていた。後者は今でも存在しているが、以前との大きな違いは、首長=神々という等式がもはや成立しなくなったことでいる。 と言える。それに対し、現代の牧師 (talatala) には、滞在が三年味で司祭の聖性は一時的であり、一村民と神との中間的立場にあったと言える。それに対し、現代の牧師 (talatala) には、滞在が三年にと言える。それに対し、現代の牧師 (talatala) には、滞在が三年にと言える。それに対し、現代の牧師 (talatala) には、滞在が三年にと言える。それに対し、現代の牧師 (talatala) には、滞在が三年にと言える。それに対し、現代の牧師 (talatala) には、滞在が三年は一時的者として神との仲介役を果たす適性があるといえる。

い神がキリスト教の神であり、服従を誓ったのがフィジーの伝統的を多く持つフィジー社会では、かなり根強く残っている。威力の強は、土地の持つ力が征服後も維持されていることを含意してもいる。位式では土地の首長からヤンゴナが授けられねばならぬということ神が服従することと読みかえることができる。しかし征服首長の即待してもりの首長からやンゴナが授けられねばならぬということは、土地の持つ力が征服後も維持されていることを含意してもいる。威力の勝を多く持つフィジー社会では、かなり根強く残っている。威力の勝を多く持つフィジー社会では、かなり根強く残っている。威力の勝を多く持つフィジー社会では、かなり根強く残っている。威力の勝を多く持つフィジーの伝統の指

では牧師の存在を支える経済力が「力」を示す指標となっている。 牧師はキリスト教の神を村に存在させるべき支えとなる司祭である。牧師はキリスト教の神を村に存在させるべき支えとなる司祭であしたフィジー・キリスト教文化が、牧師(talatala)と信徒牧師(vakatawa)の存在をなくてはならぬものにしている。その欠落は、その社会の欠陥性を示す徴となる。儀礼が常に重要な位置を占めるフィジー社会では、聖的レヴェルで儀礼を行なえる資格を持つめるフィジー社会では、聖的レヴェルで儀礼が常に重要な位置を占めるフィジー社会では、聖的レヴェルで儀礼を行なえる資格を持つめるフィジー社会では、聖的レヴェルで儀礼を行なえる資格を持つめるフィジー社会では、聖的レヴェルで儀礼を行なえる資格を持つめるフィジー社会では、聖的レヴェルで儀礼を行なえる資格を持つめるフィジー社会では、聖的レヴェルで儀礼を行なえる資格を持つめるフィジー社会では、聖的レヴェルで儀礼を行なえる資格を持つの方れる。キリスト教以前なら武力がその指標となっている。

d 社会関係とキリスト教

乞食を真似しただけである。 ち食を真似しただけである。 生ぎていけるという気持ちを蔓延させることになっている。しかしまた避難所を持たぬフィジー人は一人もいないという利点もある。生ぎていけるという気持ちを蔓延させることになっている。しかしかな食物が、怠け者を許し、フィジー人全体にそれ程働かなくても現である。ケレケレーソリという伝統的な相互扶助システムと、豊現である。

を擁して伝統的な首長制を維持している。キリスト教会もこの制度垂直軸上に見る関係では、象徴的な存在になったとは言え、首長

ト教的論理からの見直しをせまられているのが現状である。 いる。水平軸上の関係では、伝統的な相互扶助システムも、キリス養は、今までの首長制や村の在り方に変化をもたらす要因になって養は、今までの首長制や村の在り方に変化をもたらす要因になって上、大抵の首長は、信徒の一員として、信徒説教者 (dau vunau)のを認め、首長の席を説教壇と同じ高さに設けている所もある。しか

3)儀礼的関係に見られる心情

伝統―首長制擁護の心情

(a) 訪問儀礼

うにと唱える。 うにと唱える。 うにと唱える。。

確認の儀礼であり、神の恩恵を相互に贈与し合う儀礼である。通常訪問儀礼とは、お互いに相手をホストとゲストとして認める相互

行事となっていく。 準備する段階になると若者が呼ばれ、次第に村全体の男達を集める象する。最初は、二者だけで儀礼が行なわれていても、ヤンゴナをはその場でヤンゴナを飲む。その共飲は相互の象徴的な一体化を表

(tabua) やケロシン、布等を親戚から集めたり、買い求める。 一枚編む。男達は臨時のトイレや台所を建て、贈与交換用の鯨歯 がに、村人全員が準備を始める。既婚の女達は大きなマットを一人 氏族単位に割り当てられた贈与交換(solevu)用の品物をそろえるた なる。この時には、ホストになる村では半年前から金を積みたて、 なる。この時には、ホストになる村では半年前から金を積みたて、 なる。この時には、ホストになる村では半年前から金を積みたて、 は、開催地を変えて行な 世俗的な訪問儀礼が、村全体をまき込むような集合的レヴェルで (tabua) やケロシン、布等を親戚から集めたり、買い求める。

人にとっては大変な出費であった。 一九八二年十月末にヴィワ村に二五〇名のゲストを五日間迎えた 一九八二年十月末にヴィワ村に二五〇名のゲストを五日間迎えた 一九八二年十月末にヴィワ村に二五〇名のゲストを五日間迎えた

ンゴナパーティを開いて、それにあてる。現金集めは、氏族単位やが、決して強制はされない。不足分が出たら、村全体で金集めのヤフィジー社会では、この種の負担は村人にとって義務的ではある

達せられる。うという氏族の名誉心や見栄を刺激し、割り当ての目標額は大抵はうという氏族の名誉心や見栄を刺激し、割り当ての目標額は大抵は村を二分するグループ単位で行なわれるため、気前の良さを見せよ

れる。そして首長と村の男達が待つ儀礼会場に案内される。に控えの家に案内されて旅の疲れをいやし、ヤンゴナを二杯振舞わる。そのリズミカルな音が村中に響く。ゲストは村の境界線上(海が朝からヤンゴナの根を鉄の筒に入れ、鉄の棒で打って粉にしていが朝からやンゴナの根を鉄の筒に入れ、鉄の棒で打って粉にしていくが、そして首長と村の男性全員がかかわる。ゲストが訪れる日には、若者

最初の鯨歯の時には、木、丸焼きの豚やタロ芋の束が、それぞれスピーチと共に贈られる。(儀礼では、ホスト側からゲスト側へまず鯨歯、ヤンゴナの大きな

夕御一行への贈り物です。」
「首長にかなった方法で、トゥイ・マズアを卸一行への贈り物です。」
「首長にかなった方法で、トゥイ・マズアを割します。
「首長にかなった方法で、トゥイ・マズアとかお見せできないことをお許しがあります。
「首長にかなった方法で、トゥイ・マズアタをお迎えします。こ

その贈り物を受ける挨拶として、ゲスト側から、

容は人によって多少異なるが、枠組は先に述べた簡略な訪問儀礼のに!われわれの中にいますキリスト、……」(パ)と述べられた。話の内ある。全ての親類であるチーフが健康で、神の恩恵がありますよう「……これは真の首長ロコ・トゥイ・ヴィワから受け取った宝で

あるようにと祈る。 達の贈り物はささいなものであることを謝り、神の加護が相手側に時も、公式の場合も同じである。相手の首長とその村を誉め、自分

、 (「正]確認)と言ている首長制と(:1)伝統=儀礼主義擁護の心情が読みとれる。以上の訪問儀礼からは、(;)フィジー人社会の統合の中心となっ

る。

(主) 首長制擁護の心情

たとえ首長が出席しない個人的レヴェルの訪問儀礼でも、ヴィワたとえ首長が出席しない個人的レヴェルの訪問儀礼でも、ヴィワへの贈り物という形式がとられ、受け手は首長に代って受ける。村を異にする者同士の儀がとられ、受け手は首長に代って受ける。村を異にする者同士の儀がに彼が立派な人物でも、タイトルそのものの持つ名誉に変化はない。首長の名誉とは、ロコ・トゥイ・ヴィワの場合には、一八七四年十月だに彼が立派な人物でも、タイトルそのものの持つ名誉に変化はない。首長が出が立派な人物でも、タイトルそのものの持つ名誉に変化はない。本の名誉とは、ロコ・トゥイ・ヴィワの場合には、一八七四年十月にフィジーを英国に移譲した時に署名した十三名の大首長のタイトルの一つを継承しているという事実とその歴史性にある。

(ii) 伝統=儀礼主義の擁護

富さに対する評価には一向に変化が見られない。以前には贈物は土鹼など現金で買う品物が加わっても、儀礼の厳粛さと贈りものの豊をっていても、交換される品物にケロシン、ビスケット、布地、石浸透し、マーケットで現金を得て帰ってくるのが主に女性の役割との表明である。この評価は文化に深く根ざしたもので、現金経済が低礼を厳粛に、贈り物を豊富に行なうことは、相手に対する敬意

になっている。この力もまた首長の力として儀礼の文脈では語られさを示してはいるが、それよりも村人の経済力=現金獲得力が問題の豊かさを表わしていた。現在でも贈り物の豊富さは、土地の豊か地の産物であり、その豊富さはその土地を治める首長の力(mana)

肯定し、それを自らのアイデンティティの拠り所とするものである。基盤となるものである。伝統主義とは、土地の社会関係をそのままらの村の在り方をそのまま表現するものであり、伝統主義を支えるものであり、首長の名の下でなされる。フィジーの首長制とは、彼フィジーでは、あらゆる集合レヴェルの儀礼は村全体を表象する

(b)コミュニタスの伝統

間の連帯感や親密性を生み出す無礼講の機会がある。を強調する所にある。厳粛な儀礼の後には必ずホスト―ゲスト両者現代のフィジー文化の特徴は、厳粛性よりもむしろ親密性や友好性一つの社会では決して厳粛な儀礼だけが行なわれている訳ではない。(ので扱ったのは、個人や集合的レヴェルでの公式性の問題である。

ヤンゴナの給仕をしてまわる。ここで両者の境界は視覚的に大きくト側の若者はタノアのまわりに席を変え、ホスト側の若者と一緒に中には、ゲスト達の間に座り込んで話し始める者も出てきた。ゲスの握手から崩れ始めた。この時には村の主だった婦人達も会場に入の握手から崩れ始めた。この時には村の主だった婦人達も会場に入

両者間に生じたコミュニタス的な親密感こそが、この訪問儀礼の成夜通し、共にヤンゴナを飲み、共に踊るなかで親密になっていく。を歌う。女達がゲストの男達の膝をつついて踊ろうと誘いに来る。を歌う。女達がゲストの男達の膝をつついて踊ろうと誘いに来る。よれ始め、ホストーゲストの対立よりもむしろ何処の村でも見られ崩れ始め、ホストーゲストの対立よりもむしろ何処の村でも見られ

功を測る基準となるのである。

訪問儀礼が成功であったことを示している。 に、ゲストの一人が女性の踊り手一人一人に一ドル札を与え、自分のつけていた巻きスカートをも与えながら、踊り手にちょっとしたのつけていた巻きスカートをも与えながら、踊り手にちょっとしたのが、
は、
がストの一人が女性の踊り手一人一人に一ドル札を与え、自分にだ。
に、
がストの一人が女性の踊り手一人一人に一ドル札を与え、自分に抱え音楽に合わせてダンスを踊る光景が見られた。これらはこの最中で抱え音楽に合わせてダンスを踊る光景が見られた。これらはこの最中で抱え音楽に合わせてダンスを踊る光景が見られた。これらはこの最中で加える。

火して爆発させる竹の大砲 (dakai) の作製と使用が子供達に許され許される。竹の筒にケロシンを入れて熱し、そこで生じたガスに点最後の教会儀礼が行なわれる。そして午前零時に説教壇の牧師が最後の教会儀礼が行なわれる。そして午前零時に説教壇の牧師がよ鼓 (lali) が鳴らされる。この時を境に、村の規律違反がいくつか太鼓 (lali) が鳴らされる。この時を境に、村の規律違反がいくつか太鼓 (lali) が鳴らされる。この時を境に、村の規律違反がいくつか太鼓 (lali) が鳴らされる。この時を境に、それぞれ意味論的な重要性を持っていた。同様に一月一日の午前零時を境にして、厳粛性要性を持っていた。同様に一月一日の午前零時を境にして、厳粛性

る。 るホラ貝の音だけである。それに対し、年始めのこれらの騒音は、 ている。通常の村落内の音は定期的な教会のラリと、村会を知らせ の大砲、ブリキ缶の音は、その徴付けられた時間の非日常性を示し でいた。村の婦人達や教会の世話役はその日でもタブー違反だと言 何人か加わって、インド人の雑貨商から購入してきたビールを飲ん リやブリキ缶を叩き、竹の大砲を爆発させることが許される けは勝手に叩いても怒られない。 日常の村人の活動が一時停止し、いくつかのタブー違反が認められ 人も見え、甘そうにビールを飲んでいた。この日は無礼講であった。 ったその席には、日頃尊敬を受けている村会議長と村の最年長の老 ってはいたが、あえて咎めることはなかった。村の若者が全員集ま (村によって期間は異なるが、普通は二週間) 音は、 村内での飲酒は常に禁止されているが、一月一日には村の長老も また通常は教会儀礼の開始を知らせる神聖なラリを、この時だ 連続的な時間の流れを区切る。異常な時間に鳴るラリ、 新年の午前零時からしばらくの間 は、真夜中でも、 ラ

る日々を徴付けている。

(4)キリスト教とフィジー文化主義

の青年会活動では特に明確に見られる。その姿勢が、キリスト教会積極的に保護、育成しようとしている。その姿勢が、キリスト教会化的伝統をこのように引き継いでいるだけでなく、フィジー文化をるだけでなく、乱痴気騒ぎまでも取り込んでいる。教会は在来の文フィジーのキリスト教活動は、世俗の儀礼をすべて受け入れてい

a)訪問儀礼

神の加護を祈ることであった。 神の加護を祈ることであった。 一九八六年二月にヴィワ教区の日曜学校の教師のための講習会が、 の家に泊まることになった。村に着くやさっそく牧師の家に導かれ、 の家に泊まることになった。村に着くやさっそく牧師の家に導かれ、 の家に泊まることになった。村に着くやさっそく牧師の家に導かれ、 でった。その日の晩と翌朝の講習が終った後、二人は村の牧師に滞在 中の世話に対する礼として鯨歯 (tabua)を贈った。この時に語られ な内容は、世俗儀礼の場合と同じくロコ・トゥイ・ヴィワを崇え、 も内容は、世俗儀礼の場合と同じくロコ・トゥイ・ヴィワを崇え、 は、ヤンゴナを でいた。この時に語られ でいた。このは、 でいた。このは、 でいた。 で

活動が逆にそのネットワークを活性化している。クを十分に活用して、当初は村々に浸透していった。現在では教会ン手段(sevusevu 儀礼)と、それによって成立しているネットワーいる。しかしメソディスト派は、ヤンゴナを使うコミュニケーショプロテスタントの他の宗派(ヨ)では、ヤンゴナを飲むことを禁じてプロテスタントの他の宗派(ヨ)では、ヤンゴナを飲むことを禁じて

日曜日の午前十時からの教会の説教のために、他の村の信徒説教

(meke)、寸劇などのコンテストを行なっていた。 月に一回聖歌、ポピュラーソング、教会劇、伝統的な踊りでは、いくつかの村がまわり持ちで、青年部 (mataveitokani)が三八四年以前には月に一回、日曜日の夜に小教区内の三村が交互に訪者(dau vunau)が時折招かれる。またヴィワ村が小教区だった一九

教会が地域でフィジー文化を積極的に育成保護しようとしている

で、西洋音楽の普及に大いに役立っている。聖歌とドラマが教会で、聖歌の歌詞はすべてフィジー語であるが、メロディーは西洋のものやフィジーへのキリスト教伝来の歴史をドラマ化したものである。的な踊り (meke)が、村の長老から青年達が習い、村内での発表会態度が、このコンテストではよく分かる。伝統文化としては、伝統

る形でこの儀礼を行なうのは、教会の青年会の活動を除いてはない。青年会の代表がセヴセヴ儀礼を行なう。結婚前の若者が村を代表すある。主催村に着くと、その村の首長か代表者にまず挨拶に行き、この大会は、青年が村の代表者としての責任を負う唯一の機会でメケとポピュラーソングと寸劇が村の広場で行なわれる。

(b) コミュニタスの伝統 ――ブレイクアップ ――

宴を昼食時に催した。長老の一人が、婦人部のその班の代りにゲスに、キリスト教以前の異教徒の文脈に基づいて死者の霊が留まる。しかしこれは一般に広く行なわれている慣習で、教会も黙認しと考えられる墓場の掃除をすることは、キリスト教の教義に抵触する。しかしこれは一般に広く行なわれている慣習で、教会も黙認しと考えられる墓場の掃除をすることは、キリスト教の教義に抵触する。しかしこれは一般に広く行なわれている慣習で、教会も黙認している。そしてその年最後の日曜日の当番を終った婦人部の一つのと考えられる墓場の掃除をすることは、キリスト教の教義に抵触する。こかしてが、婚人部のその班の代りにゲスを考えられる墓場の掃除をする。これに関する。これに関する場合では、またのは、大田の中の代りにゲスを存在して、大田の中の代りにゲスを発えられる。

けた。 トに対してセヴセヴ儀礼を行なった。村会議長がそのヤンゴナを受

最後の日曜の夜の礼拝 (lotu)終了後、先程の家で、ヤンゴナが飲まれた。杯が進むにつれて主催者の婦人達からの悪戯が、上座の年長者や信徒牧師、牧師に仕掛けられた。各人の前に置かれた貝殻の灰皿が取り除かれ、代りに大きな鍋が置かれる。ヤンゴナ用の椀の水皿が取り除かれ、代りに大きな鍋が置かれる。ヤンゴナ用の椀の水里が取り除かれ、代りに大きな鍋が置かれる。ヤンゴナが飲まれたまは彼へのプレゼントになる。

高位の人物である牧師が「変わる」ことによって、象徴的に時が変われ、それを贈り主に着せて仕返しをした。婦人服がそれぞれ上座の生、それを贈り主に着せて仕返しをした。婦人服がそれぞれ上座の中長者に着せられ、最後には牧師が女装させられた。 にている。そしてクリスマスの朝には、祖先の霊達との交感の伝統している。そしてクリスマスの朝には、祖先の霊達との交感の伝統の手段である墓の掃除さえも行ない、この世界内でも、あの世とものであるとしている。「すべてが変わる時にない期せずして吐いた言葉に表わされている。「すべてが変わる時にない期せずして吐いた言葉に表わされている。「すべてが変わる時である関係を作り出そうとしている。この意味するものは、長老の一人が期せずして吐いた言葉に表わされている。「すべてが変わる時である関係を作り出そうとしている。「すべてが変わる時である関係を作り出そうとしている。「すべてが変わる」とによって、象徴的に時が変わるに着せられ、一座の爆笑を誘った。 婦人用の服がそれぞれと座の世帯のである 東京といる。「すべてが変わる」は、それを贈り主に着せられ、一座の爆笑を誘った。 場入用の服がまず先程の長

()霊的レヴェル――神と神々――

(i) 中心における神との出会い

思いで教会に逃げ込み、神に祈って呪術から救われた老人がいる。を働いていた時、仲間の一人に呪術をかけられたのを知り、必死の者が神に出会って改心し、熱心な信者になった例もある。また金鉱っているのは神の導きだったと語る。以前は酒ばかり飲んでいた若物師になるようなエリートは、人生を合理的に反省して、この道を辿熱心なキリスト教徒は、それぞれキリスト教の神に出会っている。

識は、教会で中心的な役割をになう人々にとっての重要な信仰の基再発見)となっている事例が数多く見られるが、これらの体験や認神による病気治癒 (神との出会い)、信仰が人生肯定の契機 (神の彼らは現在熱心な信者として中心的な活動をしている。

(ii) 周辺における「神々」との出会い

盤となっている。

頂点とする階層の下に現在では組み入れられようとしている。 して明確な訳ではないが、氏族神は祖先神としてキリスト教の神を他の悪さをする精霊(yalo)との二種類に分けられる。この分類は決れていることも事実である。「神々」は通常テヴォロと言われるキリれていることも事実である。「神々」に関する現象がおびただしく語ら「神々」である。しかし「神々」に関する現象がおびただしく語ら現在では決して積極的には語られることがないのが伝統的な

れに対し「神々」とは周辺的な領域で出会い、常に問題をはらんで、キリスト教の神との出会いは、中心たる教会においてである。そ

となっている。

るのである。そして、

新年からしばらく続く無礼講の期間への序曲

て開墾をやめさせようとした。しかし彼が反抗してやめないので、いる。また父の村に新しく畑を拓いた若者に、その土地の神が怒っは気を失い、村人の中には細身のその霊の姿を見かけたという者もいる。霊の娘に見込まれた若者は、彼女が訪ねてくると癲癇の症いる。夜中無意識に歩き回る少年には白髪の老婆がついていると言いる。夜中無意識に歩き回る少年には白髪の老婆がついていると言いる。夜中無意識に歩き回る少年には白髪の老婆がついていると言いる。

到る。

罰として彼を癲癇にした。

教的な、伝統的な他界との緊張関係の上に成立していることを示し教的な、伝統的な他界との緊張関係の上に成立していることを示し易に進入できぬ領域である。この事実は逆に「神」の領域は常に的には夜である。村内の昼間は「神」の時空間であり、「神々」は容のよう。

(ii) 両世界を体現する信徒牧師の存在

界的存在である。 攻撃もよく受けている。彼はまさに両世界を一身に体現している境に入った。しかし霊的経験も豊富にあり、「神々」(tevoro)からのヴィワ村の信徒牧師(vakatawa)は、「神」を体験して信仰の道

ワーを浴びていた時突然気を失った。その後急に字が書けるように成所で彼は一番年上だったが、まだ字が書けなかった。ある日シャた。牧師にもっと勉強するなら養成所へ行くように勧められた。養したいと思った時には、近くに聖書しかなく、それだけを読んでい彼は育った村ではほとんど学校に行けなかった。自分で勉強を

一村に迎えられ、次に一九八一年からヴィワ島に赴任し現在にまでなった。こうして神の導きで卒業することができ、信徒牧師として

うとした。しかし何とか振りほどき、追い返した。その晩その木に住む二人のテヴォロが彼を襲い、彼の首を絞め殺そい。島の低地を拓いて畑を作ろうとして、一本の大きな木を切った。彼は信徒牧師であるにもかかわらず、テヴォロとのかかわりが多

(5)結論と今後の展望

フィジー人が、フィジーに住むインド人に対して抱くイメージは、

いる。 国人の貿易商に売っている。 儀礼の会場作りなど村への奉仕になる活動と、村の予算獲得のため 二日村のために働いている。 間と労力をさくことはない、フィジー的伝統を知らぬ、 ために力を尽くす、利己的でない人間であるとのイメージを持って る。それに対し、フィジー人は相互扶助と客をもてなす気前の良い ドを持ち込んで避難していた話が引き合いに出される。彼らは個人 人間で、 日常の社会的関係は、ずっと厳しいものだと考えられている。 ここに述べてきたフィジー人の特徴とことごとく対立する。 家から追い出されたインド人の家族が、政府の建物の軒下にベッ 樹皮布を作る木 (masi) を植えて育てたり、ナマコを取って中 村の仕事からは現金を個人的に得ることはできないが、週に 以前からの伝統を守り、首長をもりたて、個人よりも村の 自分さえ良ければと思っている。村を作り、 海岸の埋め立て工事、トイレの設置、 村のために時 異教徒であ 彼らの 親戚

敵は特定化されておらず、

個人のレヴェルでもその問題はまだ意識

化されていない回。

いる。

社会関係は、ソリーケレケレの基盤の上に立つ。このシステムは社会関係は、ソリーケレケレの基盤の上に立つ。このシステムは社会関係は、ソリーケレケレの基盤の上に立つ。このシステムは

統的なネットワークを通して普及したキリスト教は、現在ではそのリスト教会はそれを全面的に支持し、積極的に利用もしている。伝集合レヴェルでは、フィジーの伝統的文化が豊富に現出する。キ

る。

除いて、後はすべて現状維持を望んでいるのである。この決議では特にこれからフィジー人の美術では、インド人の現在以上の進出を警戒して、国会議員の三分の二をフィジー人が確保し、総督と首を警戒して、国会議員の三分の二をフィジー人が確保し、総督と首を警戒して、国会議員の三分の二をフィジー人が確保し、総督と首権にはフィジー人が必ずなり、フィジー人の土地の権利と漁業権を相にはフィジー人が必ずなり、フィジー人の土地の権保し、総督と首権にはフィジー人が必ずなり、フィジー人の土地の権別を通じて逆にそのネットワークを活性化させている図。

が強まるのを教会が望ましいと考えているなら、教会もそこでの決長にふさわしい方法で執行されるのを目撃している。人々の連帯感とで終る。会場の第二位の席は聖職者の席である。彼らは儀礼が首るのがキリスト教である。訪問儀礼のスピーチは神の加護を祈るこ、集会の規模が大きくなるに従って、首長制とともに表面に出てく

議を支持している事になる。

じキリスト教徒でもフィジー・キリスト教徒だけに独自な世界であ信仰を個人のレヴェルで観察するなかで見えてくる。この世界は同の世界をも含んで成立している。その「神々」の世界はキリスト教最後に、フィジーのキリスト教の世界は、それを取り巻く「神々」

いもので、都市に住んでも村人であることをやめないフィジー人の結論として、社会関係を支える相互扶助のシステムは非常に根強

不即不離の関係で成立している。 では、フィジー人のアイデンティティはキリスト教といる精神的な拠り所は、「神」と「神々」とからなるフィジー的キリーの精神的な拠り所は、「神」と「神々」とからなるフィジー的キリーが、それらをも支えている。第三に社会関係や政治体制ほど明確ではないが、それらをも支えて、文化そのものを表象していると言える首長制が拠り所になっている。第一の現実的な拠り所になっている。第二に文化的には、フィジーを

ここに整理しておく意味がある。リスム)の問題が表面化してこよう。それ故、今回現時点の問題を首長制はますます象徴的になるが、逆にフィジー人主義(ナショナーの後都市化が進み、人口が増え、土地の価値が増大するに従い、

Ì

- パーセントがアセンブリィズ・オヴ・ゴッドである。 トがカトリック、三パーセントがセヴンス・デイ・アドヴァンティスト、二(1)フィジー人キリスト教徒の七八パーセントがメソディスト、十三パーセン
- 後一五パーセント。 (2) "REPORT ON THE CENSUS OF THE POPULATION VOL.3.1976"
- (∞) K.L, Gillion. "THE FIJI INDIANS" 1977. Canberra. p.1.
- 一万人。中国人五千人。南太平洋の人々六千人。 六七万人中、フィジー人三十万人。インド人三四万人。パートヨーロピアン
- (45)Subramani(ed.)"The Indo=Fijian Experience" Univ.of Queensland Press.1979. P.xi.
- (6)Derrick,R.A."A HISTORY OF FIJI" 1974(1946).Fiji p.53 | 八四〇年頃に

- FOR POWER IN EARLY FIJI" 1985.Univ.of the South Pacific. びついている。他に、Routledge, David "MATANITU,THE STRUGGLEびついている。他に、Routledge, David "MATANITU,THE STRUGGLEバウの三つがあり、ラウ諸島のラケムバ、ヴァヌアレヴ島のザカウンロヴは、主なマタニツは、ヴィティ・レヴ本島の南東に、レワ、ヴェラータ、ムは、主なマタニツは、ヴィティ・レヴ本島の南東に、レワ、ヴェラータ、ム
- (7)橋本「キリスト教と『他界観』」年報人聞科学 vol.7.1986.p.93.
- (∞)Deane,W."Fijian Society" London. 1921. p.123.
- (9)ヴィワ島には、征服者たる外来王、ロコ・トゥイ・ヴィワがいる。村は征服(9)ヴィワ島には、征服者たる外来王、ロコ・トゥイ・ヴィワにからる。村はにいる。現在ロコ・トゥイ・ヴィワの継承者は首都に住立、ロコ・トゥイ・ヴィワに即位式のヤンゴナを授ける役割を持ち、村で第一位の地位となっている。現在ロコ・トゥイ・ヴィワの継承者は首都に住立、四コ・トゥイ・ヴィワとその称号のが、両者間に地位的な違いはない。ただロコ・トゥイ・ヴィワとその称号のが、両者間に地位的な違いはない。ただロコ・トゥイ・ヴィワとその称号のみ、土地の首長では、近服者に対している。
- んで爪跡が残れば怠け者である。 道」がある。その中に勤勉かどうかを調べる「つかみ石」がある。石をつか(11)死者の魂が、祖先達の国に辿り着くまでに途中で様々な試練を受ける「魂の
- Thomson, Basil "The Kalou-vu (Ancestor-Gods) of the Fifians" in Journal of the Royal Anthropological Institute. V.24, 1895, pp. 340-59.
- (12) ordained ministers (=talatala yaco) は、一九八五年には、一五一名、ministers on probation (=talatala vakatovolei) は五八名、休職者三四名で計二四三名いる。"THE CONSTITUTION of the METHODIST CHURCH in Fiji" 1983.Fiji.p.9.Rev.Tekei,Paula."A I VAKAMACALA NI I WILIWILI NI LEWE NI LOTU WESELE 1985." 1986.Fiji.p.2.
- リスト教会の津村牧師からのアドヴァイスを採用させて頂いた。(3)日本語訳に関しては、日本フリーメソジスト教会での名称と、大阪日本橋キ

- は、 いったれることになる。以前は、病人が出た時にも、首長への贈物がなされがうたれることになる。以前は、病人が出た時にも、首長への贈物がなされがうたれることになる。小さな問題でも首長への謝罪をすることで終始符れ)これは謝罪の儀礼(na i bulubulu)と言う。大きな問題は村会議にかかる
- (6)Horart A M "KINGCHID"Oxford University Prop 1060(1007) 75 76 二六点、村の婦人会二四点、その他雑事が第二位の四〇点を獲得していた。 一二六点、村の婦人会二四点、その他雑事が第二位の四〇点を獲得していた。 金、品物、愛情、知識、時間を何にどの位注ぐかを聞いた。その結果、家庭区の中心の村ナンドゥリであった。そこで牧師が一家の女王たる婦人達に区の中心の村ナンドゥリであった。そこで牧師が一家の女王たる婦人達に区の中心の村ナンドゥリであった。そこで牧師が一家の女王たる婦人達に区の中心の村ナンドゥリであった。そこで牧師が一家の女王たる婦人達に
- (f)) 簡本「フィジーのveicaravi |民族学研究四元巻一号、一九八四年、xx 27-82、おカートは首長の即位式の構造を分析するなかで、首長が神として再生すると読み取っている。
- (18)橋本、ibid.pp.48–49. (17)橋本「フィジーのveiqaravi」民族学研究四九巻一号、一九八四年、pp.27–62

(19)セヴンス・デイ・アドヴァンティスト派とか、エホバの証人のようなセクト

では、ヤンゴナやタバコなど神の宿なる身体を害するものを禁じている。

- っても過言ではない。 たが、現在ではキリスト教会の活動だけが村落間の紐を強化していると言たが、現在ではキリスト教会の活動だけが村落間の紐を強化していると言(20)キリスト教以前では、戦いの戦略として村落間のネットワークを使ってい
- (21)橋本、一九八四 ibid. pp.61-62